

小湊の教化

「磨が帰って参りました」

「磨とは……蓮長のことか」

「はい」

「清澄山を追われて、西条の華房におるとか人の噂できいておったが、つつがないか」

「元氣のようでございます。何か急用あつて私どもに逢いたい様子……」

「師匠道善御坊に詫びを入れて、清澄山に帰りたいたいと言うのなら、わしの願いも叶うと言うものじゃ」

「他人の眼につかぬよう、この早朝に参ったのでございましょう。奥の部屋に通しておきましたから、早く逢つてやつて下され……」

「暫く待て、いま日天様が昇る処じゃ、二人してわが子の行く末を祈つてからでも遅くはあるまい」

わが子蓮長が、清澄寺に意外な説法をして、師匠道善御房と地頭の東条左衛門尉との激怒を受けたと聞いてからここ十数日来、早朝の浜辺に出て、朝日を待つて何事かを祈願するのが貫名次郎重忠の日課になっていた。

やがて、梅菊女が夫重忠の側に立つて静かに昇ってくる朝日を一心に拝むのであった。

「日出でて、まず高山を照らす」

兩人して拝むこの日輪の光芒は、既に房総の山々を照らし、否、遙かなる駿河の富士の頂きを照らしておるのであったが、この兩人には、朝陽が海面におもてを出して、その黄金の波が渚に寄せてきた時に始めて、それと知れるのであった。

「お主よう尋ねてくれた、清澄山での説法のことを聞いて案じてはおったが、わしはお前を信じ
ておったぞ」

「曆よ、早よう父上とともにもう一度清澄寺に帰つて、道善御房様に入れて下され、地頭様へは御房様からよしなに取計らつて下されるでしょう。よかつた。よかつた。よくここを尋ねる決心がつきましたなあ。母は今日の日をどれほど待つていたことか……」

両親とも交々に、奥座敷に招じた蓮長に語る言葉である。

「実は蓮長も、そのことで夜の明けやらぬ中に、ここを尋ねたのでございます」

「そうであらうとも」

梅菊女はにつこり笑つて膝を乗り出した。

「これから鎌倉へ行こうと思います」

「……」

両親の顔色はさつと変つた。蓮長それに動ずる気色もなく言葉が続けた。

「父母報恩経には「若し父母信なくば、教えて信ぜしめよ、戒なくば戒を与えよ、聞かずんば聞かしめよ、智慧なくば智慧を教えよ、而して安穩ならしめよ」とあります。私こと本来ならば故郷に錦をきて帰るのが世の常でありましょう。しかるに帰山の説法に先ず塔寺を追放されたことは、只々遺憾至極と思し召すでありましょうが、実はこれこそ仏の思召しであり、わが信ずる法華経、わが行ぜんとする法華経の説相なのであります。

母上、善日鷹は十二歳にして出家し、清澄山に登りましたが、その間、一山の掟として、女人禁制の故に、母上は一度といえど清澄山には登られませなんだ。これ何故でありましょうか、女人には五障三従ありとなしてこれを嫌う故であります。清澄山山門より八丁の所には、牛馬女人結界と石標がありまして、女人を牛馬に同じて、門前払いを食わしておるではありませんか。これが大慈大悲平等の仏の教えでありましょうか。……蓮長これに不審を感じて経文を案じました所、華嚴経には、「女人ハ地獄ノ使ナリ、能ク仏ノ種子ヲ断ズ外面ハ菩薩ニ似テ内心ハ夜叉ノ如シ」とあり銀色女経には「三世ノ諸仏ノ眼ハ抜ケテ大地ニオツトモ法界ノ女人ハ永ク成仏スベ

カラズ」とあつて女人の成仏を許しておりません。天台大師も「他経ハ但男二記シテ女二記セズ」と云つておられます。しかるに法華経においては、八歳の童女が畜生道の衆生として、姿を改めずして即ち成仏しております。釈尊の母マカハヂヤハダイ比丘尼は一切衆生喜見如来、ラゴラの母は具足千万光相如来等、凡て女人が成仏しております。

これは法華経以外にはない未曾有の出来事であります。されば法華経以外の経文においては、女人の成仏を許しません故、出家においては、法華経を信ぜずんば、恩愛は天地にも比すべき自分の母を救うことが出来ません。

蓮長のこの身は天より降れるものにも非ず、地より湧き出でたるにも非ず、父母の肉身を分けたる身であります。我が頭は父母の頭、我が足は父母の足、我が十指は父母の十指、我が口は父母の口、この口より只今申すこと神仏も照覧あれ、仏すらこの法華経を説くに、「四十余年未顕真実」といわれております。法華経には、末代女人成仏の証として八歳の童女の得説あり、末代男子成仏の証として、ダイバダッタの得道があります。男女を等しく救う経典こそ、一切衆生を化導する経典であり、蓮長にとつても父母孝養の経典であります。

清澄山における説法は恩師道善御房を導き奉らんがための法門でありましたが、実に、また父母に孝養を致さんがための報恩でもありました。……されば清澄の山を追われたのも、仏の御遺言を実行せんがため、はたまた、父母に孝養を致さんがためなりと感ずる時、難の来たるをもつ

て、大いなる喜びと致しておるものでございます」

蓮長法師の前に座した両親は、不審の色より謹聴の面持となり、果ては感激の涙を頬に浮べるのであった。

この世の中に生ける仏かおるとしたならば、わが子ではあるが、このような人を云うのではなからうか。

折柄、座敷一杯に照りこんだ朝陽の裡に、端然と座した蓮長法師の姿は、わが生んだ子ではない、後光さすが如き仏の姿ではなからうか。

母たる梅菊女は、いつしか、合掌して聴聞しておるのだった。

法華経の諸経中における最為第一の由縁を説き、今こそ法華経の流布すべき時機であり、法華経をもって一切衆生を導くべき時節なることを、仏説を引いて語りこの法華経の大施をかかげて、仏教流布の中心地である都鎌倉に、今日只今より旅立たんとする決意を披瀝した蓮長は、おもむろに最後につけ加えた。

「蓮長兼ねて期する処あって、今後より日蓮と名乗ります。日は法華経第二十二如来神力品に「如日月光明、能除諸幽冥」とあり、蓮は法華経第十五湧出品に「不染世間法、如蓮華在水」とあるに縁由いたします。

しかれば何故に日蓮と名乗るか、これひとえに、法華経を世間に行ずる人、必ず末法において

現われるという仏陀の予言仏記に従うが故であります……」

言葉はとぎれた。

座に沈黙があつた。

「合点が参つたぞ、お主の説法、清澄山へ帰ることは要らぬ、行け、鎌倉へ」

父重忠の声に力があつた。

「もう、梅菊、そうではないか、磨の話をきけば」

「さようでございます。女人と生まれて罪深いものよと、仏様の前に気兼ねをいたしておつたこの妻の身が、磨の説法を聴聞して、何かすうつといたしました。その法華経をもつて、余経において鬼とのしられた女人を救つて下され、いや、一切の人々を導いて上げて下され」

「では、母上も納得が参られましたか」

蓮長法師の頬にも法悦の涙が流れていた。

「最早今日より念仏は申さぬぞ、磨の唱える南無妙法蓮華経を唱えよう」

「今鎌倉に行けば、何時帰えるとも知れぬ、磨の身の上、磨の名を呼ぶと思つて、今からは南無妙法蓮華経と朝な夕なに唱えましょう」

「では御両親とも改宗なされますか、嗚呼有難や……日蓮今後鎌倉の法戦に如何なる大敵が来ようとも断じて臆するものでありません。」

御両親を導びき得ずして法華經の功力なし、生みの親を改宗させ得ずして、わが口に題目を唱えましようやと心得ておりましたのに、唯今の御言葉、日蓮今生の喜び、之れに過ぐるものがありません。

父上、改宗のしるしとして今後は妙日と名乗り給え。母上は妙蓮と法号をお授け申しませう。父母となり子となるも宿習のいたすところ、日蓮が法華經のお使いならば釈迦多宝の二仏、さだめし父母と変じ給うたのでありませう。その大果報に因んで、妙日、妙蓮と名乗り給え」

「有難や——」

期せずして、重忠、梅菊の二人の口より出た声は、何時しか三人唱和する唱題の声に変わっていた。

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

南無妙法蓮華經

(注 今回まで、善日鷹連長法師の名を用いたが、今後は単に聖人と申し上げることを読者了されたし)

